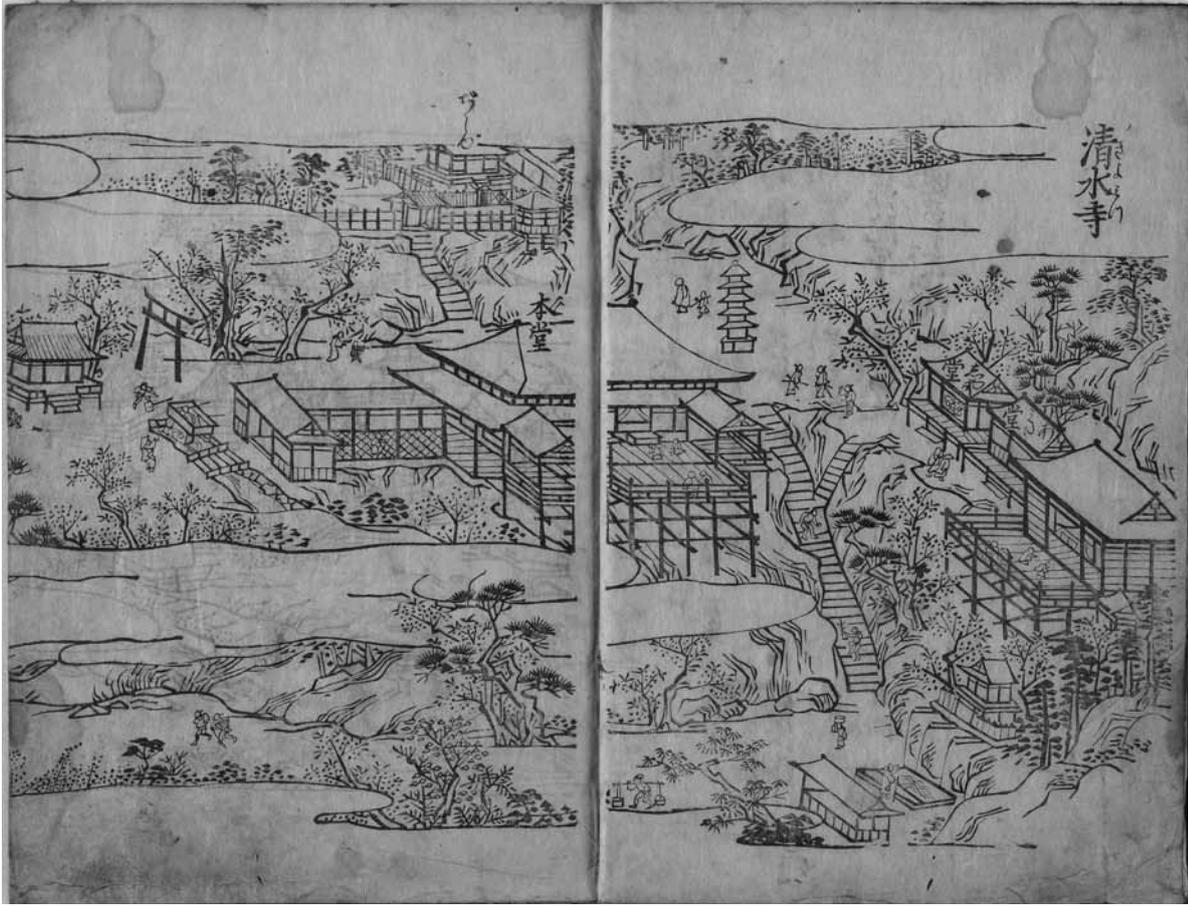


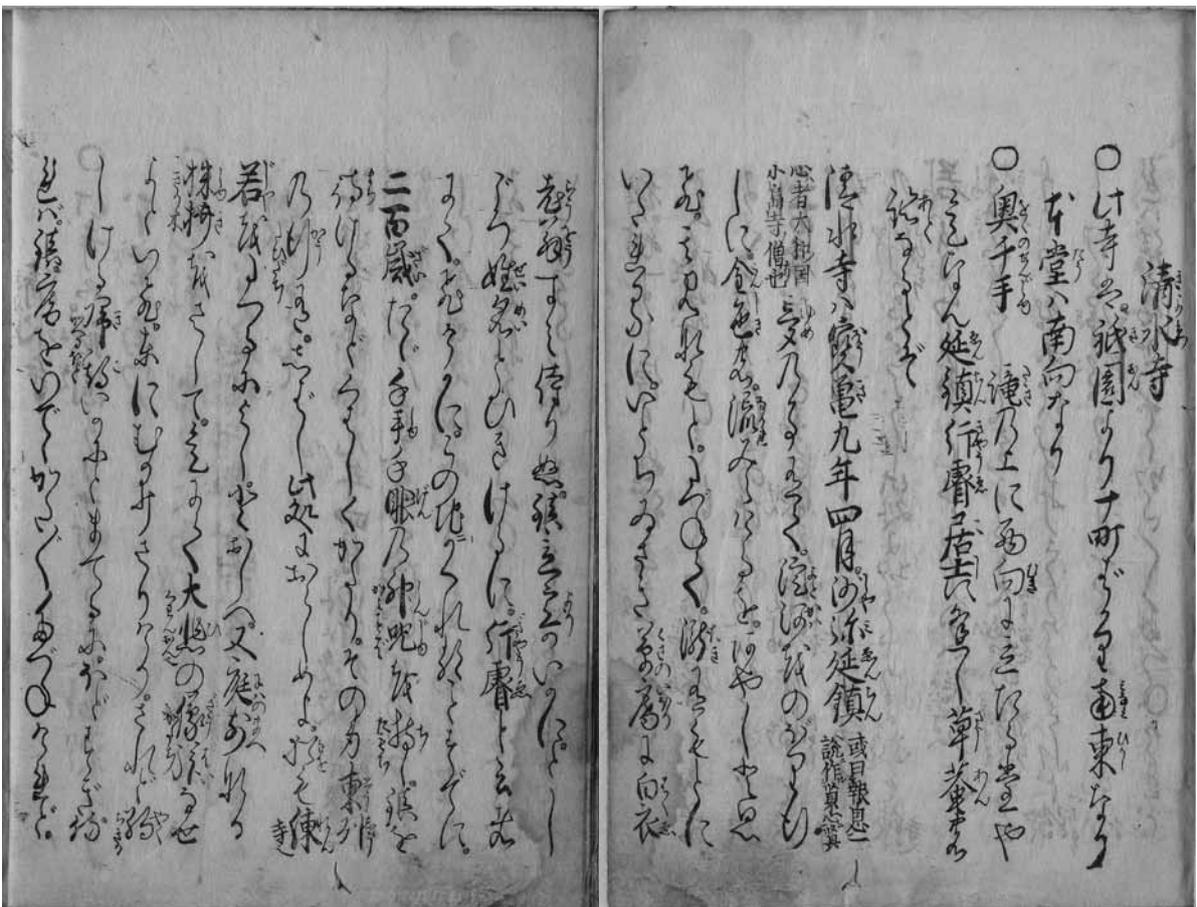
卷四「清水寺」



京都府立総合資料館蔵



京都府立総合資料館蔵



卷四

【原文】

清水寺

○此寺は。祇園より十町ばかり南東なり

本堂は南向なり

○奥千手 滝の上に南向に立たる堂也

是なん延鎮行叡居士に逢し草庵の

跡なるとぞ

清水寺は宝亀九年四月。沙弥延鎮 或曰報恩一説作ル賢心二賢

心者大和ノ国小島寺也ナリ 夢の事有て 淀河をのぼり行

しに。金色の。流みえけるを。あやしと思

ひ。其みなもと。たづねて。瀧有もとに

いたれるに。いとちるさき草庵に白衣(四才)

老翁すみ侍りぬ。鎮立寄いかに。とし

ごろ姓名とひきけるに。行叡と云者

にて。ひそかに。この地にかくれることすでに。

二百歳。たゞ千手千眼の神 呪 を 持 し。鎮を

待けるなどくはしくかたり。その身東州

の 行 有。しばし此処におらしめよ。猶も練

若 をたつるによし。とおしへ。又庭前なる

株 情 をさして。是にて大 悲 の像 拜なせ

よといひ。東にむかぬさりけり。されど 約

しける 帰 期 いかにとまてるに。ほどすぎ侍

れば。鎮。庵をいでゝかたぐたづねけれど。(四ウ)

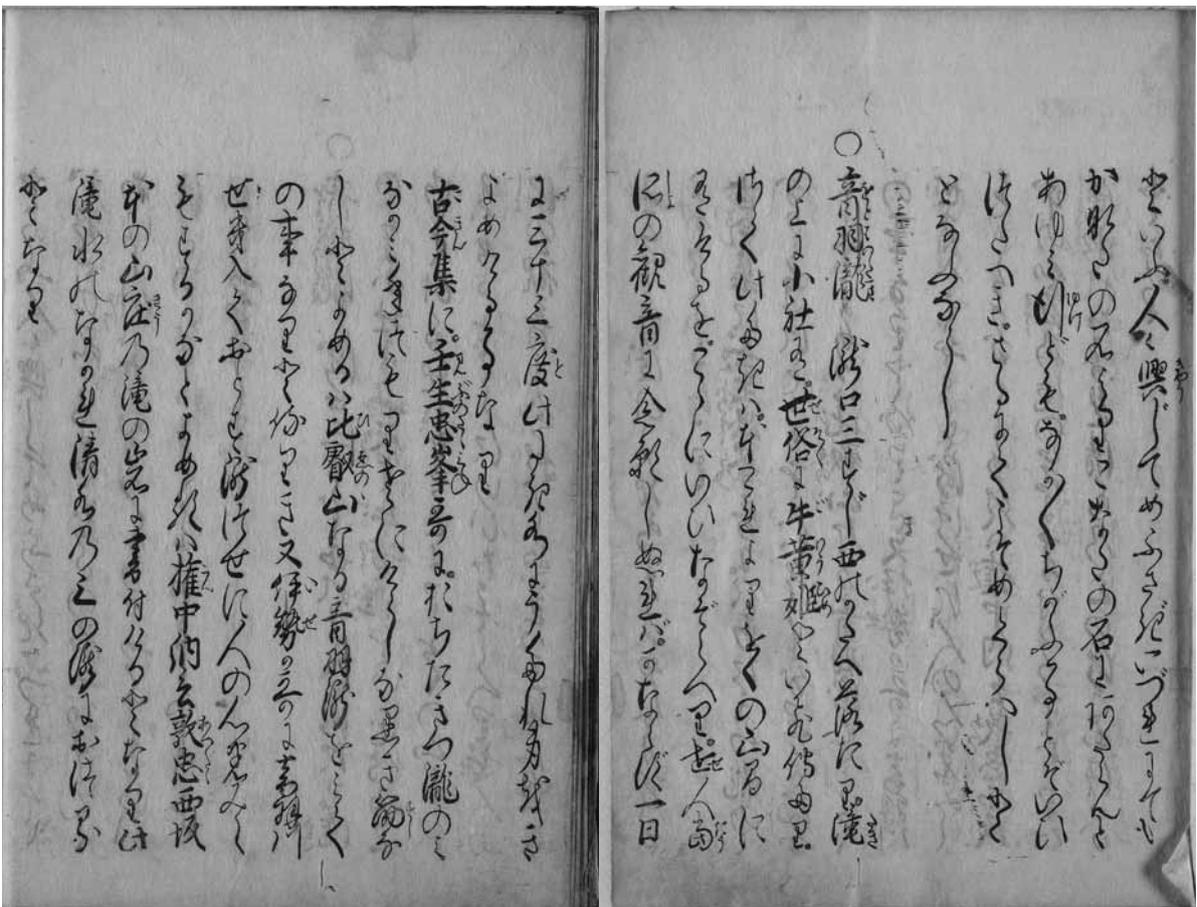
終にあふことなかりしに。一日山科の東峰
にいたりしみに。彼翁の履見つけ
ければ。さてぞ。大悲の應。現。ならんとし
ほたのもしう思ひて。さきの株材に
對し。とし月おくりしに。延暦十七年と
かや。鎮守府將軍坂田村鹿を獵して
此にきたり。いたづがはしきあまり。かの草
庵にいこひしかは。鎮。上のしなくつぶさ
にかたりしに。將軍ふかく感歎し妻
の善高子とはかりて。自宅をうつし
寺とし。像をきざみ。安置しけるとな(五才)
見元序 歎書二十八

見元序 歎書二十八
延鎮は。報恩法師の徒にて。清水寺に住。
坂將軍田村の親友也。將軍勅をうけ。奥州
乃逆賊高丸をうちし時。鎮にそのよし
たり。法力をからでは。など。貴命をかしこく
とげ侍らんやと。ふかくたのまれしかば。
鎮。諾。しぬ。扱高丸すでに。駿河をおち
いれ。清見関に。次。しけるに。將軍の出師に
おどろき。それより奥州にて。鋒を交
へ侍るに。官軍勢おどろへ。矢つきあやう
かりしに。小比丘小男子あらはれ。賊の矢を(五ウ)

拾ひ將軍と與へ。しかも高丸を射神
樂崗に斃し首とりかへりて。帝城
にたてまつり。先鎮にあやしきことども
つげ。いかなる法ぞやと。たつねけるに。され
ば。法中に勝軍地藏勝敵毘沙門有。我二像
を造り供。修し侍るとぞ將軍そのまゝ殿に
入見けるに。矢痕刀痕みな二像に被り。両
脚に泥土つきけり。將軍猶もおどろきて。
このこと奏し侍れば。帝ますくうやまひ
給ふとなり(六才)

清水寺鎮守本地文殊号地主権現四月九日祭
一字抄に清水の氷をわくる瀧の音は
ことよるこそむすぼうれけれ

○地主権現堂 石壇三四間ものぼりて。南向に
立たり。本堂のうしろ也
此所より。京かたのこらず見はるけぬれば。
遊筵 あらそひひゞきぬ。此堂の西東のは
しに石一つすへけり。かの名をめくら石(六ウ)



といふ。人々興じてめふなきいづれにても
かなたの石よりこなたの石にあたらんと
あゆみ行ども。なか／＼ちがふ事とぞいひ
つたへき。さるにてこそめくらししと
となふならし

○音羽瀧 をとはのたき 瀧口三すじ西のかたへ落たり。滝

の上に小社有。世俗に牛黄姫といひ傳たり。
さて此たきは。本これよりをくの山間に

有けるを。こゝにいひなぞらへり。世人當

所の觀音に念願しぬれば。かならず一日(七才)

に三十三度此たき水にうたれ身をき

よめける事なり

古今集に。壬生忠峯哥みなのだみねに。おちたきつ瀧のみ

なかみ年つもり老にけらしな黒き筋すしな

しとよめるは比叡山ひゑのなる音羽瀧をみて

の事なりと侍りき又伊勢いせの哥に音羽川

せき入ておとす瀧つせに人の心のみえ

もするかなとよめるは権中納言敦忠あつた西坂

本の山庄みやうの滝の岩に書付けるとなり此

滝水のなかれ清水の三の瀧におつる
となり(七ウ)

【校訂本文】

清水寺

○此寺は、祇園より十町（注1）ばかり南東なり。本堂は南向なり。

○奥千手（注2） 滝の上に西向に立たる堂なり。是なん延鎮（注3）、

行叡居士（注4）に逢し草庵の跡なるとぞ。

清水寺は宝龜九年（注5）四月、沙弥延鎮（或曰報恩（注6）、一説二

賢心卜作ル、賢心ハ大和ノ国小島寺（注7）ノ僧ナリ）夢の事有て、淀

河をのぼり行しに、金色の流れみえけるを、あやしと思ひ、そのみなも

とたづねて、瀧有もとにいたれるに、いとちめさき草庵に白衣老翁すみ

侍りぬ。鎮、立寄いかにとしごろ姓名とひきけるに、行叡と云者にて、

ひそかにこの地にかくれることすでに二百歳、たゞ千手千眼の神呪（注

8）を持し、鎮を待けるなどくはしくかたり、その身東州（注9）の行

有。しばし此処におらしめよ。猶も練若（注10）をたつるによし、と

おしへ、又庭前なる株併（注11）をさして、是にて大悲（注12）の像

拝ませよといひ、東にむかひさりけり。

されど約しける帰期（注13）いかにとまてるに、ほどすぎ侍れば、鎮、

庵をいでゝかたぐたづねけれど、終にあふことなかりしに、一日山科

（注14）の東峰にいたりしみちに、彼翁の履見つけければ、」さてぞ。

大悲の應現（注15）ならん」と一しほたのもしう思ひて、さきの株併

材に對し、とし月おくりしに、延曆十七年（注16）とかや、鎮守府將軍

鎮守府將軍坂田村（注17）、鹿を獵して此にきたり。いたづがはしきあ

まり（注18）、かの草庵にいこひしかは、鎮、上のしなくつぶさにか

たりしに、將軍ふかく感歎し妻の善高子（注19）とはかりて、自宅を

うつし寺とし、像をきざみ、安置しけるとなり。三元亨釈書（注20）二

十八二見ユ

延鎮は、報恩法師の徒にて、清水寺に住、坂將軍田村の親友也。將

軍勅をうけ、奥州の逆賊高丸（注21）をうちし時、鎮にそのよしか

たり、法力（注22）をからでは、など貴命をかしこくとげ侍らんやと、

ふかくたのまれしかば、鎮諾しぬ。扱高丸すでに、駿河をおちいれ、

清見関（注23）に次しけるに、將軍の出師におどろき、それより奥州

にて、鋒を交へ侍るに、官軍勢おとろへ、矢つきあやうかりしに、

小比丘小男子（注24）あらはれ、賊の矢を拾ひ、將軍に與へ、しかも高

丸を射、神樂岡（注25）に斃しを、首とりかへりて、帝城にたてまつ

り、先鎮にあやしきことどもつげ、いかなる法ぞやと、たづねけるに、

されば、法中に勝軍地蔵勝敵毘沙門（注26）有。我二像を造り供修（注

27）し侍るとぞ。將軍そのまゝ殿（注28）に入見けるに、矢瘡刀痕み

な二像に被り、両脚に泥土つきけり。將軍猶もおどろきて、このこと奏

し侍れば、帝ますくうやまひ給ふとなり。

清水寺の鎮守、本地文殊（注29）、号地主権現四月九日に祭る。一字

抄（注30）に、

清水の水をわくる瀧の音はことよるこそむすぼうれけれ

坂本（注39）の山庄（注40）の滝の岩に書き付けけるとなり。此の瀧水の流れ、清水の三つの瀧に落つるとなり。

○地主権現堂 石壇（注31）三四間（注32）ものぼりて、南向に立ちたり。本堂（注33）の後ろなり。

此所より、京方残らず見晴るけぬれば、遊筵 争ひ響きぬ。

此の堂の西・東の端に、石一つ据へけり。彼の名を、めくら石といふ。

人々興じて、目塞ぎ、いづれにても、彼方の石より此方の石に当たらん

と歩み行けども、なかなか違ふ事とぞいひ伝へき。然るにてこそ、めく

ら石と称ふならし。

○音羽瀧 瀧口三筋、西の方へ落ちたり。滝の上に小社有り。世俗に

牛黄姫といひ傳えたり。さて此瀧は、本これより奥の山間に有りけるを、

ここに言ひなぞらへり（注34）。世人堂所の観音（注35）に念願しぬれ

ば、かならず一日に三十三度此の瀧水に打たれ身を清めける事なり。

古今集に、壬生忠岑（注36）歌に「落ちたきつ瀧の水上年積もり老

いにけらしな黒き筋無し」と詠めるは、比叡山なる音羽瀧を見ての事な

り、と侍りき。又、伊勢（注37）の歌に「音羽川せき入れて落とす瀧つ

瀬に人の心の見えもするかな」と詠めるは、権中納言敦忠（注38）、西

【注】

- (1) 約一・〇九キロ。
- (2) 今日、「奥の院」「奥の千主堂」と呼ばれる。三面千手観音を本尊とする。
- (3) 平安時代初期の僧。生没年未詳。
- (4) 伝説上の僧。
- (5) 七七八年。
- (6) 奈良時代末期の僧。報恩大師。延鎮（賢心）の師。
- (7) 現在の奈良県高市郡高取町にあった古刹。子島寺。
- (8) 千手観音の靈妙な呪文。
- (9) 関東地方。
- (10) 寺院。「阿練若」の略で「れんにや」とも言う。
- (11) 木材。
- (12) 観音菩薩。大悲は衆生の苦しみを救う仏の大きな慈悲をいい、観音菩薩のことを大悲菩薩ともいう。
- (13) 帰る時期。
- (14) 現在の京都市東部。山科盆地一帯を指す地名。
- (15) 仏や菩薩が衆生に応じた姿で現れること。
- (16) 七九八年。
- (17) 鎮守府は奈良時代・平安時代、蝦夷鎮庄のためにおかれた軍政機関であり、將軍はその長官。「坂田村」は平安時代初期の武将、坂上田村麻呂。
- (18) 大変疲れたので。
- (19) 坂上田村麻呂の妻。高子。三善氏の娘。
- (20) 鎌倉時代、虎関師錬の著した高僧伝。元亨二年（一二三二）撰述。三〇卷。
- (21) 「奥州」は白河・勿来の関から北の、磐城・岩代・陸前・陸中・陸奥の五か国の総称。現在の福島・宮城・岩手・青森の四県と秋田県の一部にあたる。「高丸」は伝説上の人物、蝦夷の高丸。
- (22) 仏法の力。
- (23) 駿河の国。現在の静岡県静岡市清水区にあった関所。
- (24) 小さい僧侶と小さい男性。
- (25) 山城の国。現在の京都市左京区の地名。
- (26) 折れば戦に勝てると信じられた地藏菩薩と毘沙門天。現在の清水

寺本堂において本尊十一面千手観音の両脇に安置された地藏菩薩・毘沙門天が、この伝承の二像という。

- (27) 仏を供え祈禱すること。
- (28) 仏像を安置する仏殿。
- (29) 文殊菩薩。
- (30) 和歌一字抄。藤原清輔による平安時代の歌学書。一字または二字の文字を含む句題を列挙し、それぞれの例歌を示した書。現存諸本は違いが大きく、この歌は現存の二十八本のうち四本のみに収められており、四本とも「滝水乱糸」の句題のもと、底本の「滝の音」「ことゝ」の箇所語句が「滝のいと」「いとゝ」になっている。底本のままでは歌意がとりにくいため、和歌一字抄の方に合わせて現代語訳した。
- (31) 石でできた壇・段。
- (32) 長さの単位。一間は約一・八二メートル。
- (33) 清水寺の本堂。
- (34) 以前ここより奥の山間にあったものに見立て、それと同じ名前と呼びならわし、もとのものと同等のものとみなしたということ。
- (35) 清水寺の本尊、十一面千手観音のこと。
- (36) 平安中期の歌人。三十六歌仙の一人。「古今和歌集」撰者の一人。この歌は「古今和歌集」巻一七（雑上）におさめられる。
- (37) 平安前期の女流歌人。三十六歌仙の一人。この歌は「拾遺和歌集」巻八（雑上）におさめられる。
- (38) 藤原敦忠。西坂本に音羽川を引き入れたという。
- (39) 比叡山の西麓。修学院辺の地名。
- (40) 山の中にある別荘。山荘。

【現代語訳】

清水寺

○この寺は、祇園から十町ほど南東にあります。本堂は南向きです。

○奥千手 滝の上に西向きに立った堂です。これこそが、延鎮が行叡居士に逢った草庵の跡とのことだ。

清水寺は、宝龜九年四月、僧の延鎮（あるいは報恩によると、一説には賢心といい、賢心は大和の国の小島寺の僧です）が靈夢を見て、淀川

を上つていくと、金色の流れが見えたのを不思議に思い、その源流を尋ねて滝の源にたどり着いたところ、とても小さい草庵に白衣の老翁が住んでいました。延鎮が立ち寄って年のころと姓名を尋ねたところ、行叡という者で、ひそかにこの地に隠れてすでに二百年であり、千手観音の呪文を知っており、延鎮を待っていたなどと詳しく語りました。行叡は、自分は関東の方に旅立つので、しばらくここにいなさい、さらに寺を建てるとよい、と教え、庭の前の木材を指して、これで観音の像を作れといい、東に向かつて旅立ちました。

しかし、約束した帰る日とはいっつかと待っていると、しばらく経ちましたので、延鎮は草庵を出て方々尋ねましたが、結局会うことはありませんでした。ある日山科の東の峰に行く道で、例の翁のはきものを見つけたので、さては観音の化身であったと一層信心深く感じて、先の木の方を向いて年月を送っていたところ、延鎮十七年とのことでしたか、鎮守府將軍の坂上田村麻呂が鹿狩りでここに来ました。田村麻呂はたいそう疲れて例の草庵で休んだところ、延鎮は上のような事どもを詳しく語りました。將軍は深く感銘を受け、妻の三善高子と相談して、自宅を移して寺とし、像を刻んで安置したとのこと（この話は『元亨釈書』卷二十八に見えます）。

延鎮は報恩法師の弟子であつて、清水寺に住んでおり、「坂將軍」とも呼ばれた坂上田村麻呂の親友でした。將軍は勅命を受けて奥州の逆賊高丸を討つ時、延鎮にそのことを語り、法力を借りなくてはとうして勅命を立派に果たせるでしようかと懇願しましたので、延鎮は承諾しました。高丸がすでに駿河を攻め取り、清見関に滞在していたところ、將軍の出兵に驚きそのうち奥州で戦をしました。朝廷方の軍勢が勢いを失い、矢が尽きて危ない状況になったとき、小さい僧と小さい男とが現れ、賊軍の矢を拾って將軍に与えました。さらに、高丸を射て高丸が神楽岡に倒れて死んだところを首を取って帰り、朝廷に献上し、すぐに延鎮に不思議なことどもを告げて、どのような法力だったのかと尋ねたところ、「私たちの法に勝軍地蔵、勝敵毘沙門というものがあり、私が地蔵菩薩・毘沙門天の二像を造り、祈祷しました」とのことでした。將軍がそのまま仏殿に入ってみると、矢のきざや刀のあととすべて二像が受けていて、両脚には泥土が付いていました。將軍は一層驚いて、このことを帝に申し上げましたところ、帝はますます延鎮を敬いなさったとのこと（清水寺の鎮守は、本地は文殊菩薩であり、地主権現といひます。四月

九日に祭りをします。和歌一字抄に、「清水の…（清水寺の水を割る滝の水は、乱れた糸がより合わさるようになつた）」という一首が載せられています。

（岸本恵実）

○地主権現堂 石段を三四間ほどのぼつたところに、南向きに立っています。本堂の後ろです。

ここから、京のあたりを残らず見晴らせるので、行楽客が場所取りをする声が聞こえています。この堂の東西の端に石が一つずつ据えられています。その名を「めくら石」といいます。人々がおもしろがつて、目をふさいで、どちらからでもあちらの石からこちら石にたどりつこうとして歩いてゆくけれども、容易にはたどりつけないことだと言ひ伝えられます。そういうわけで「めくら石」と呼ぶようです。

○音羽の滝 滝口から三筋、西の方へ水が流れ落ちていきます。滝の上に小さい社があります。世間では牛黄姫を祀つたものと言ひ伝えていますが、さてこの滝は、もともと、ここより奥の山間にあつたものに基づいて、音羽の滝と呼ぶようになったものです。世の人がこの観音に念願するときは、必ず一日に三十三度この滝水に打たれて身を清めたということです。

古今和歌集中の、壬生忠岑の歌に「激しく流れ落ちる滝の上流は、年月がたつて老いてしまつたに違いない、流れには、白髪のように白い筋ばかりで、黒い筋が無いから」と詠んでいるのは、比叡山にある音羽の滝を見てのことだということです。又、伊勢の歌に「音羽川を堰き止めて水を引き入れて落とす、滝水の激しい流れに、このような趣向を凝らした人の風流な心が見えもすることだ」と詠んでいるのを、権中納言敦忠が西坂本の山荘の滝の岩に書きつけたということです。この滝水の流れは、清水の三つの滝に落ちるといふことです。

（鳴海伸二）